

「カルヴァン派の殉教者」

「カトリクス・ド・メジシス」第一部について

西 川 祐 子

序

バルザックの「カルヴァン派の殉教者」には、フランス宗教戦争の先がけとなった歴史事件「アンボワズの陰謀」（一五六〇年）にからまる秘話が書かれている。多数の登場人物が入りみだれ、パリの市民階級、フランス宮廷、カルヴァンの支配するジュネーブといった対照的な風俗が描かれている華やかな歴史小説である。新教徒側からカトリクス・ド・メジシスにあてた密書を運ぶ使命を受けたクリストフの運命を中心に緊迫感にみちた筋が展開する。

「人間喜劇」の作品の中では、あつかわれた時代から、この小説が歴史小説とよばれるのに一番ふさわしい。「ふくろう党」や「暗黒事件」が大革命以後の近い過去の物語であるのに、「カルヴァン派の殉教者」の時代は十六世紀だからである。

しかし、この小説は完成した歴史小説として評価されたことが少なかつた。その理由は「カルヴァン派の殉教者」が「カトリクス・ド・メジシス」三部作の第一部を形づくっているからである。三部作の内容は、カトリクスに関する三つの独立したエピソードを集めた

ものである。それに重要な序文がつけられている。序文の中で、バルザックは、「カトリクス・ド・メジシス」の意図は、従来の歴史家によつて歪められてきたカトリクス像を訂正することであつたと述べている。バルザックによれば、カトリクス・ド・メジシスが偉大なのは、彼女が、「唯一の信仰、唯一の主権」という近代社会の救いになりえた主義を持っていたからである。

この序文（一八四三年）は、一八三一年前後に選挙のために書いた政治論文、一八四二年の「人間喜劇総序」とならんで、バルザック自身の政治思想を最も明確な形でうち出したものである。「カトリクス・ド・メジシス」に関する批評が、この政治思想をめぐるものにかたよつたのは自然の成行でもあつた。そこで、「カトリクス」は、三部作の中でもカトリクスの独白という、最も純粹な形で思想が語られている短篇「二つの夢」と序文とを中心にして論じられることになり、最も大部で、長篇と呼びうる重厚な内容をもつた「カルヴァン派の殉教者」はかえつて、なおざりにされることになつた。

アクション・フアンセーズ紙は、一九〇三年に「我々の師・カトリクス・ド・メジシスとバルザック」と題して「カトリクス・ド・

メジス」の主の序文と「二つの夢」からとった抜粋を掲載した。

むしろ、王党派、カトリック主義の思想を最もよく表すもの、としてであった。これに対して、ジッドは、「カトリヌ」におけるバルザックは、純粹の王党派、カトリックではなくて、彼が描いたのは「実力による統一」というエートピアである、と主張した（ジイド「続プレテスト」の「日づけのない日記」Ⅲ）。

論争は、このように一見、文学から離れた地点で行われやすかった。「カトリヌ」の文学的価値については「失敗作」、「最もわざとらしい作品」（Baldensperger）という批評が生まれた。ルカイチは「歴史文学論」の中で「バルザックは、カトリヌ・ド・メジスについてただ興味ある論文を書いた」（傍点筆者）とだけ述べ、それ以上はこの小説については語っていない。

しかし、ここでは、「カルヴァン派の殉教者」を独立した一つの歴史小説として、とりあげてみたい。モリス・バルデッシュは「ふくろう党」と「カルヴァン派の殉教者」を比較したとき、作中人物が歴史上の人物であるか虚構の人物であるかという点に注目して「カルヴァン派の殉教者」の作中人物はルカミューを除いては全て歴史上の人物であるから、「ふくろう党」が歴史小説であるのに対して「カルヴァン派の殉教者」は小説化された歴史的挿話にすぎないといっている（小説家・バルザック「二五五頁」）。しかし、ルカミューという作中人物がこの小説の唯一の虚構であるとすれば、逆にこの人物に照明をあて、この人物の意味を考え、この人物から「カルヴァン派の殉教者」を読めばこの作品の新しい面をみつけることが出来るのではないだろうか。

（一）「カルヴァン派の殉教者」における虚構

「アンボワズの陰謀」当時の宗教改革運動は、フランスにおいて、どのような形をとっていたか。教会財産を国に返却させ、教会の高位者の莫大な収入を廃止しようという宗教改革の思想は、いち早く下層階級の人々、商人、職人達をとらえ、新教徒の勢力はしだいに拡大していった。それに対抗するカトリック勢力の中心は、「向疵」の異名をもつ名将フランソワ・ド・キユイズ公とその弟で「アルプスの彼方の法王」と渾名されるロレーヌ枢機卿である。当時の国王フランソワ二世は、ヴァロア家の出身であるが、弱年のため、王妃マリー・スチュアルの伯父にあたるギユイズ兄弟に完全に籠絡されている。ギユイズ家は国政を左右する権力を持ち、彼らの周囲には反王権の旧教徒貴族達が集っている。カトリック勢力が「異端」を王国から追放する決心をかためるにつれ、新教徒は団結し、また反ギユイズ派の貴族は、この宗教改革運動を利用するために、新教側に身を投じた。新教貴族の中心はナヴァル王アントワヌ・ド・ブルボンと弟コンデ公である。ブルボン家はヴァロア家に次ぐ王位継承権をもっていた。

小説「カルヴァン派の殉教者」は、新教派がギユイズ兄弟の手からフランソワ二世を奪いとうと計画した「アンボワズの陰謀」の前夜から始まる。毛皮商の息子で熱烈な新教徒であるクリストフは見知らぬ男に呼びだされ、セーヌ河に浮ぶ小舟に連れてゆかれる。舟には、クリストフの他に、カルヴァンから派遣された牧師ショージュ、新教軍武將ラ・ルノジー、新教派のかくれた首領であるコンデ公が

乗っている。

「この四人の男は、民衆の信仰と、弁舌の才と、兵士の腕と、闇にかくれた王権とを表していたのだ。」〔カルヴァン派の殉教者〕七五頁

この冒頭の場面は、様々な利害の入りまじったフランス宗教改革運動の内容を明快に図式化してみせてくれる。動乱前夜の不安な時代の雰囲気もよく伝えている。

宮廷には、ギユイズ兄弟に敵意を抱いている母后カトリヌ・ド・メジンスがいる。彼女はフランソワ二世の摂政として振舞はずであつた権力をギユイズ家に横取りされたのであつた。コンデ公は、この度のギユイズ家に対する陰謀に、カトリヌをも利用するつもりである。そこで、コンデ公はカトリヌに、商売を利用してカトリヌに密書を手渡す使命を託すのであつた。

一方、クリストフの父、毛皮商ルカミュは、店にいながら、事のすべてを見抜いていた。彼は長年宮廷御用商人をつとめて来た老獪な商人である。同業組合内での勢力も大きく、三部会の第三身分の議員である。王室外科医アンブロワズ・パレの研究を経済的に援助したこともあつた。彼の秘かな野心は、法律を勉強している息子クリストフの為に貴族領と、最高法院評定官の職を買い、ルカミュ家を市民階級から新興法服貴族の列に成り上らすことであつた。彼は宗教改革運動にゆれ動く時勢を深く読み、先を見通している。自分はカトリックでいよう、息子は新教徒の運動に加つてみるがよい。カトリックが勝てば、金の力で息子を危険から救う、カルヴァン主義が勝てば息子が家門を興すだろう、いずれにしろ、市民階級は確

実に権力への道を登りつづけるだろう、と彼はいう。老ルカミュは勅定書と共に密書を懐にした息子をはげましてプロワ城へ送り出すのであつた。

しかし、ギユイズ兄弟はすでに新教徒の陰謀を探知していて、彼らを一網打尽にしたうえ、かくれた首領がコンデ公である証拠を握ろうと狙つていた。宮廷に潜入したクリストフはマリー王妃の炯眼に、たちまち見破られる。カトリヌ太后は、とつさに自らの手でクリストフと密書をギユイズ兄弟につき出すことにより、辛うじて危機を脱する。クリストフは拷問にかけられる。彼が白状すればコンデ公の命とカトリヌ太后の地位が危い。クリストフは耐えた。

「アンボワズの陰謀」は完全な失敗に終つた。敗れた新教徒の民衆や貴族達は次々と処刑される。ギユイズ家の勢力はいよいよ絶大で、カトリヌ太后や、老ルカミュの様々な努力にもかかわらず、コンデ公とクリストフの死刑もせまつてくる。

この時、国王の急病が事態を一変せしめた。カトリヌ太后は、新しい手術により国王を救おうとするパレを押しとどめ、息子を見殺しにすることにより、ギユイズ家の野望をくだいた。新王シャルル九世が即位し、カトリヌは摂政として、またたく間に勢力を拡げる。彼女は、旧教と新教の意見の衝突を和げるための「ボワシーの会議」を開きたいと提案する。彼女の真の意図は論争によつて両派を共に消耗させ、時を稼ぐことであつた。ギユイズ家とブルボン家もさらに闘争を続けさせ、その闘争の間に、ヴァロア家の王権を強固にするつもりなのである。

クリストフも無事、釈放され、自宅で漠然と褒賞を夢想してい

る。しかし、コンデ公からの返事は冷たく、新教牧師シヨジューは、さらにあらたな犠牲行為を要求するばかりである。クリストフは宗教改革運動に幻滅を感じた。しかし、カトリヌ太后だけは、市民階級に酬いることを心得ていた。ある夜とつぜん、新王と共にカトリヌ自身が町人ルカミユの家を訪れ、食卓を共にし、席上、クリストフに貴族領と最高法院評定官の職をかうための特別許可状を与えた。但し、それには、クリストフがカトリックになるという条件がついていた。太后は新教思想の中に王権をおびやかす共和主義思想がひそんでいるのを見抜き、いずれは彼女も再びギユイズ家と手を結ぶこと、そして十二年後「サン・バルテルミー虐殺」があることを予想していたのだった。クリストフは太后から与えられた過分の報酬と名誉に感激して王党派、カトリックに転向する。これが最高法院に名高いルカミユ家の起りであつて、老ルカミユの望みどおり彼の子孫は最高法院議長になった。

以上がバルザックの「カルヴァン派の殉教者」の大筋である。歴史をどのように文学に定着させるか、ということとは、小説としてどのような虚構を組立てるかということではないだろうか。この小説では、どの部分が、バルザックの真の創造になるのか見よう。

バルザックがこの小説を書くにあたって、次のような資料を参考にしたことが考証されている。(A. F. Lotte・バルザック研究協会版全集「カトリヌ・ド・メジス」解説)

①一つは小説である。A・ジェルモ著「一九〇年における宗教改革、またはアンボワズの騒乱」

②宗教改革時代に関する歴史研究書および回想録の類。バルザッ

クは、妹にあてた手紙からみれば、すでに一八二一年頃からこの時代に興味をもち、資料を集めていた。一八二五年には王立図書館から多数の本を借出している。

①の小説はやはり「アンボワズの陰謀」前夜からはじまっている。カルヴァン、シヨジュー、ラ・ルノジー、コンデ公といったバルザックも書いた新教派の陣営の人々が登場する。陰謀を探知したギユイズ兄弟が描かれる。次いで敗れたユグノーの貴族達の処刑の場面がある。バルザックはこの部分を、彼の「カルヴァン派の殉教者」の第十一章「アンボワズの騒乱」における処刑の場面のために剽窃した。罪人達の歌う讚美歌を写している。バルザックは後にこの本の著者に自分の「カトリヌ」を贈り、ことわりを書いた。

「カルヴァン派の殉教者」の筋をつくるにあたって、①が大きな影響を与えたことがうかがわれる。それに②から得た多くの知識と、それをもとにしたバルザックの解釈がつけ加えられたであろう。

①の中に見当たらないのは、クリストフの運命をめぐる物語である。ここに興味ある歴史事実がある。

②ルカミユというカトリヌ太后御用の毛皮商人は実在した。但し、彼は一五六〇年の「アンボワズの陰謀」当時には、すでに死んでいた。

③クリストフという毛皮商人の息子も実在した。しかも、彼は新教派からカトリヌにあてた密書を運び、マリー王妃に発見され、カトリヌの手で告発されているのである。しかし、これは同じ一五六〇年のことから「アンボワズの陰謀」よりかなり後であり、密

書は別の事柄に関する建言であつた。彼を使つたのもコンデ公ではない。

①十七世紀に、ルカミューという名の大臣がいた。壮麗なルカミュー邸も存在した。これは小説の結末で老ルカミューの子孫である最高法院議長が建てたという邸宅に一致する。

②③④のエピソードは、②の一つバルザックの所蔵した歴史書（レニエ・ド・ラ・ブランシユ著「フランソワ二世治下のフランス国家の歴史」）の中に書かれている。但し、②③④の事実の相互関係は明らかではない。バルザックにとつても謎であつただろう。しかし、これらの事実を発見したとき、バルザックの想像力がただちに三つを結びつけ一つの物語を創り出したことが推察される。一つのブルジョワの家族が成り上つてゆく話。「人間喜劇」において何度もくり返された真にバルザックのテーマである。

クリストフの物語は、バルザックによつて「アンボワズ陰謀」事件の中はじめこまれて、虚構としての役割を充分に發揮する。「カルヴァン派の殉教者」において危機は、クリストフの密書によつてもたらされた。しかし、よく注意すると、密書がおさえられたときには、既にアンボワズの陰謀のほぼ全貌がグニエーズ家に知られていた。カトリクスがクリストフと密書を故意につき出したところで大勢は変らなかつた。また、獄中のクリストフが同じく捕われの身であつたコンデ公に送つた合図は公を処刑台へ送るための確実な証拠になつた。しかし、結局のところ王の急死により、処刑は中止されたのである。虚構は史実と紙一重のところ、すれ違い、史実を侵害することがない。それでいて虚構の危機が登場人物の間にさ

まざまな反応をひき起し、各自の利害を暴露しているのである。

（二）虚構の役割

ルカーチは「歴史文学論」の中でウォルター・スコットの歴史小説の主人公を「平凡な主人公」とよび、その特徴は「コンボジション的役割」を果すことにあるといつた。スコットの小説には激突する二陣営が存在する。主人公はいわゆる歴史上の有名な人物ではなくて虚構の無名の人である。彼はちよつとした実行的な知恵と、自分を犠牲にすることさえ出来る道德的堅固さをもっている。しかし、彼には人を魅するような情熱、偉大な事業への献身的、感激的参加はみられない。彼は激しく対立する両派に決してとらわれない。彼はただ、ほとんど偶然から両方の陣営に代る代るまぎれこみ、両方に恋とか友情とかいう個人的關係を結び、その矛盾に悩む。二つの党派の間にゆれ動く主人公の個人的運命の物語の發展は、そのまま党派間の闘争の表現となるとともに、両派の偉大な代表者達を次々とみせる役割もする。スコットのウェーヴァリーについていわれたこの特徴は、バルザックのクリストフにどの程度あてはまるだろうか。

密書を運ぶ使命を受けるときのクリストフは次のように描写される。

「彼の表情には、物の全局面を理解する能力はないにしても、その周囲の一点上では巧みに立ち廻わるだけの総明さはあることを示していた」（七三頁）

コンデ公はクリストフを「新しい道具」（七六頁）として冷静に

点検している。

宮廷に潜入したクリストフは、兩陣營の運命を変えるかもしれない密書を携えているわけだが、彼自体は無力な存在である。

「二つの家族（ルカミュとラリエ）の希望である若者が、カトリヌとギユイズ家という強力にして血も涙もない二つの機械の間に狹まれて危地におちいつているのである。」（一三八頁）

クリストフは一見「平凡な主人公」そのもののように見える。彼はかなり平凡な性格の持主であり、彼の運命は二つの陣營の闘争にまきこまれ、ほんろうされる。クリストフの運命の物語が闘争の表現にもなり、兩陣營の代表者を次々と登場させる役割をも果たしていることは、すでに(一)で述べた。

しかし、クリストフは闘争の目的を知っていて、自分の意志で、密書を運ぶ使命を承諾した。彼は偶然から、兩陣營にまぎれこんだのではなく、兩陣營の闘争に積極的に参加したのである。

クリストフは如何にして新教徒となったか。「クリストフは、名付親に有名な歴史家ド・トゥをもち、しっかりと教育を受けた。

しかし、この教育は、彼をパリ大学の学生や教授団をとらえたあの疑惑と検討の精神とに導いたのだった」（八六頁）

クリストフは新教徒として自己の行動の目的をどのように理解していたか。

「私は宗教改革のことは真面目に考えてみました。大衆の幸福を目指して我々が何をしているかは心得ています。（…）今こそフランスにたかっている毛虫坊主共を払い落して、彼等の財産を王家へお返し申すときなのですが、早晚王家もこれを市民階級にお売り渡

しになるでしょう。我々の子孫の為に、いつか我々の家庭を自由にまた幸福にするために、我々は潔く死ぬ覚悟をせねばなりません。」

（七〇―七一頁）

クリストフにとって、信仰のために、ということとは市民階級のために、ということであった。ただ、彼には、宗教改革運動に、市民階級のものとは別の利害も加っていることの意味は、はつきり分っていない。コンデ公から密書を運ぶ使命を託されたクリストフは「貴族も平民も皆各々その義務を果すべき時代と心得ております」と答えた。カルヴァンは自分がカトリヌやブルボン家を利用していることを知っており、ブルボン家やカトリヌも宗教改革運動との一時的提携の意味を知っていた。しかるにクリストフは、コンデ公との連帯を錯覚し、それ故に事後にコンデ公より冷たいあしらいを受けて幻滅せねばならなかった。ここにクリストフが「道具」であつたゆえんがある。

クリストフはもし彼一人であつたら「平凡な主人公」に終つたであらう。

バルザックはこの小説の題を度々変えた。その一つに *Le gendre* 「ルカミュ家」がある。この物語の中で、結局自己の野望を遂げた人物は、カトリヌと流血は勝利であると逆説的に主張するカルヴァンと、そして老ルカミュである。毛皮商が生涯をかけてあたたためて来た計画は、クリストフの事件を機会に完全に実現したのであった。この事件の後には、老ルカミュは店と同業組合の権利を売り、そして息子のために最高法院評定官にふさわしい石造の邸宅を賣うであらう。ここにおいてもクリストフは老ルカミュの道具

である。しかし老ルカミュは「個人的野心を持つ代りに家門としての野望をいだいたのだった。」（「カルヴァン派の殉教者」八六頁）クリストフは、宗教改革運動は市民階級の利益を守るものだとして信仰に入った。父親のルカミュも同じことを宗教改革運動に期待する。カトリック教徒である彼が新教徒の息子より過激ですらある。

「『宗教改革運動は教会の所有地を市民階級のものにすることもしれんのだ。坊主どもの特権を廃止し、課税の上で貴族も市民階級も平等となり、国民の上に君臨するものは国王だけになる、ということ』を改革派は要求することになっておる。もつとも、これは国に王様を残しておく場合の話ですがね。』

『国王も廃止だって』とラリエは叫んだ。

『まあ聞いてくれ』とルカミュはいった。

『ネーデルランドでは市民階級は自分達のきめた役人によって自治をしくことになっていて、その役人達が期限つきの統領を選ぶことになっておるんだ。（…）わし等は年をとり過ぎておるから、パリの市民階級が天下をとるのは見られまいが、しかしきつと天下はとるぞ。昔は昔さ。王様も敵に向う為には、市民階級にたよらねばならなくなるぞ。今迄だつて、わしらは良い値段で援助を売つて来ているんだ。いよいよ最後まで行つて市民階級がみんな貴族になつたら、王様からの特別許可状などなしに貴族領も買えるし、領地の名を名乗ることも出来るようになるさ。……』一七八九年の大革命的の母がすでにルカミュの血を駆りたてていたのである。（同九六頁）

老ルカミュには、長年の生活に基いた階級としての根深い野心があったから、宗教改革運動の中に、自分達に有利な思想があることを素速くかぎつけたのである。若いクリストフは、それに反して、教育を通して思想を学んだところがあつた。そこで「アンボワズの陰謀」という緊迫した事態が一応おわつて、宗教改革運動に固く結集していた各派が次の各々の利害を目指して散つて行つた時、自分の目的を見失つて幻滅しなければならなかつた。

しかし老ルカミュは、市民階級が本当に政権をとるのはまだまだ何代も先のことであり、闘いは長く続くことを知っていた。老ルカミュはクリストフと同じことを、もつと別のやり方で望んだ。彼は貴族領と官職を買取ることにより除々に貴族の特権の中に食いこんでゆくことを選んだのだつた。

クリストフは結局、転向して父の野心を自分の野心とした。ここでクリストフの冒険の物語は老ルカミュの野心という、より大きな主題の中に吸収される。老ルカミュとクリストフと最高法院議長となつた毛皮商の曾孫と、そして「人間喜劇」の現代につづくルカミュ家の野望は一本に考えねばならない。そればかりか、ルカミュ家も一本の細い糸なのではなく、のちにルカミュ家と婚姻関係を結ぶラリエ家その他の無数の糸がより合っている市民階級全体を代表している。

「カルヴァン派の殉教者」の主人公はクリストフとルカミュと市民階級全体である。市民階級はギユイズ家に対してたくらまれた陰謀に巻きこまれたのではなく自分の意志で参加し、しかも独自に最も巧みに自己の階級の勝をすすめたのである。

「平凡な主人公」は二つの陣營の中間をさまよう。無党派性がその特徴である。バルザックはスコットと同じく無名の虚構の人物を主人公にしながら、その人物に「平凡な主人公」の役割を越えた党派の立場を強調した。そのことの意味をバルザックの歴史観とあわせて考えてみたい。

(三) 虚構の意味

バルザックの重要な政治論文である「王党派の立場についての試論」は小説「カルヴァン派の殉教者」と深い関係を持っている。「試論」第一章「フランスの党派」の中で、バルザックはフランスの歴史を辿り、中でもカトリクス・ド・メジンスとその時代に重点をおいているからである。

「試論」によれば党派 (parti) と徒党 (faction) は異なる。徒党は特殊の (Particulier) 利害関係をあらわすが、党派は全体に通ずる (général) 利害関係を代表する。党派という言葉は、第三身分が発生して初めて生れた。

フランスには最初、征服民族 (フランク族) と被征服民族 (ゴール族) の二つの利害関係があっただけであった。第三身分は被征服民族から出た。第三身分は、諸侯をおさえる為に王によって支持されたり、時には王と対抗する諸侯と結んだりしながら徐々に大きくなり、やがて強い物質的力をもつ三番目の勢力となった。第三身分の発生は、封建制度に対しては商業とそれに伴う社会関係を、武力に対しては科学と策略と金とを、与えられた権利に対しては自然権を、領主的司法に対してはローマ法を対置させたのだった。

「第三身分、——歴史の全体を要約しているという意味で素晴らしい言葉である。」(コナール版全集Ⅱ五二八頁)

領主と自由都市、領主と管区、地方と地方、王権と封建制度などの全ての闘争は、十六世紀以後には徐々に旧教と新教の闘争の中に吸収されていった。

「フランスにはカトリックとカルヴァン主義という二つの党派しかなかった。」(同五二八頁)

この二つの党派の争いは、物質的であると同時に思想的でもある二重の闘争であった。カトリックは聖職者と貴族と君主制の利益の表現であり、権力の統一と信仰の統一と領土的利益の統一を擁護した。カルヴァン主義は、個人と、個人の良心と、個人の思想の独立とを要求し、すべての知性と、すべての現実の勢力の政治に対する参加、科学と芸術の尊重、課税平等、商業の自由、そして共和制を主張したのである。

バルザックによれば宗教改革時代のこの二つの党派の対立が、そのままバルザックの時代の王党派と自由主義の対立にまでつながるのである。カトリクス・ド・メジンスの偉大さは宗教改革運動の意味を深く理解し、いち早く新教徒の弾圧に向ったことである。何故なら、バルザックによれば自由意志の思想こそが、個人主義に蝕まれている現代フランスを生んだのだから。

だが「試論」の中には次のような文章もある。

「この闘争が始ったときの社会状態は新教徒に有利であった。正直に言えば、彼らの政治上の主張のいくつかは道理になつたものであった。彼らがその為に闘った原理は、民衆の間に共通な思想と

調和するという有利な点を持っていた。」(同五二九頁)

「試論」におけるバルザックの歴史観の特徴は次の二点にまとめられる。

①歴史を党派の争いの中に見ている。しかも視点は第三身分の抬頭の道順を追うところに置かれている。

②宗教改革思想を政治思想と解釈していること。

「カルヴァン派の殉教者」をみよう。新教牧師ショジュは「アンボワズの陰謀」について次のように云う。

「これは単なる内乱ではない。ギユイズ家と宗教改革運動との決闘だ。」

しかし、バルザックが「試論」の中で云っているように、旧教と新教との闘争の中に、いろいろな闘争が流れこんでいる。「アンボワズの陰謀」事件では三種類の反ギユイズ勢力が一時的に提携していた。従ってこの事件も三つの性格を持っている。

①カトリックとカルヴァン主義の闘い。フランスのカトリック勢力の中心であるギユイズ家にカルヴァン宗教改革運動が対立している。

②貴族間の徒党争い。ギユイズ家とブルボン家が対立している。

王位にあるヴァロア家の勢力は弱い。ヴァロア家に次いで王位継承権を持つ二つの名門が、どちらも王を抱きこもうとして争っているのである。「アンボワズの陰謀」では、待伏せによってギユイズ兄弟の手から王を奪う計画であった。

③封建的勢力と近代的勢力の闘い。反王権の貴族を集めているギユイズ家に対して、カトリックとルカミュとカルヴァンが結んでい

る。ブルジョワ市民階級は、ここで最も大きな役割を果たす。ギユイズ兄弟は新教徒に対する闘いとは、市民階級に対する闘いに他ならない、と理解していた。彼等は、宗教改革運動の大立物を評して次のように云う。「ブルジョワ達は全く大した人物を探してくる。」

ギユイズ公は「武人の偶像」である。彼は剣によつて封建貴族を代表する。彼の弟であるロレーヌ枢機卿はフランスの修道院全部に勢力を及ぼし、カトリックの僧侶を自己の陰謀の助手や密偵に使っている。しかし、彼らは第三身分と結んだカトリックに敗れたのだった。

「『いやはや、ルイ・ド・メールの後裔、シャルル・ド・ロレーヌの後嗣(自分達ギユイズ兄弟のこと)も意気地がなかったな』と枢機卿がギユイズ公にいった。(……)」

『俺はいつておくがね、シャルル、王冠が目の前に転がっていても俺は手出しはせんつもりだ。それは俺の息子達の仕事だ。』

『君の息子は君のように軍隊と教会を手中に収めることが出来るかな』

『もっといい味方を持つさ』

『何を』

『民衆』(「カルヴァン派の殉教者」二五三頁)

老ルカミュは次のように云う。

「『わし達、ブルジョワ市民階級は自覚しなければいけない。何しろ民衆と貴族は同じように市民階級を恨みに思っている。パリの市民階級は皆に恐がられているのだ。だが王様だけは別だ。王様は市民階級は味方だということを心得ておられる。』」(「カルヴァン派の殉教

者」九五頁)

老ルカミヌはパリの同業組合を代表して、三部会第三身分の議員である。クリストフが牢獄に捕えられ、老ルカミヌが息子救出に手をつくしていたとき、彼はカトリヌから三部会第三身分の間に働きかけ、ギユイズ家反対に立ち上らすように、という指示を受けた。ルカミヌがどんな運動をしたかは、はつきり書かれてない。しかし、バルザックは、ここで、第三身分は傍観者だったのではなく、闘いの当事者であつたことを暗示しているのである。カトリヌはこの工作のおかげもあつて三部会の承認をえフランソワ二世急死の後の摂政となつた。

カトリヌは云う。

「パリの市民階級^{ブルジョワ}については、私は息子(シャルル九世)から御気嫌をとらせるつもりです。我々は市民階級^{ブルジョワ}に頼るようになるでしょう」(「カルヴァン派の殉教者」二八八頁)

それはクリストフに対する褒賞となつて現れた。クリストフは光榮に上気して少しぼんやりしていたとしても、老ルカミヌの方は、この褒賞の意味を理解していた。それ故お返しの意味でペンベヌー・テエリーニ作の盃を献上するルカミヌの態度は堂々としている。王は貴族を押えるために第三身分と結ぼうとしている。第三身分は貴族の特権の中に食い込むために王と提携する。ルカミヌにとつては身分の差があつても、これは対等な取引なのであつた。

第二章において、市民階級^{ブルジョワ}は、ギユイズ家に対する闘いに巻きこまれたのではなく、積極的に参加したのであつたことを見た。ここでは、さらに、市民階級^{ブルジョワ}は貴族と堂々と闘う一つの党派であつて、闘

争において主導権をさえ握る実力を持つてゐることがわかつた。

カトリヌ・ド・メジシスは、絶対主義の性格をカトリヌが金言としてゐる「支配するためには分割せよ」という言葉において説明した。権力の座についた後のカトリヌは、カトリックとカルヴァン主義、ギユイズ家とブルボン家を対立させることに努めるのである。

「相闘争する諸階級が互にほとんど均衡を保つて国家権力が外見上の調停者として一時、両者に対して或る程度の独立性を得るが如き時期が現れる。貴族と市民階級とを互に平衡させた十七、八世紀の絶対王政がそれである。」(エンゲルス「家族、私有財産および国家の起源」二二七頁)

絶対王政の時代は、封建制から資本主義への中世から近代への過渡期であつた。バルザックはギユイズ家に対抗して手を結んだカトリヌ、カルヴァン、ルカミヌの三人の登場人物の近代的性格を強調している。三人の共通点は三人とも彼らのエネルギー源を何らかの形で新興市民階級^{ブルジョワ}の中に持つてゐることである。

カトリヌ・ド・メジシスの先祖は急に大金持になつた一商人にすぎなかつた。バルザックは若いマリー王妃とカトリヌ太后との間の女らしい反撥を描いている。マリー・スチュアルの誇りは、ヨーロッパの三つの国の王冠を頭に載くことの出来る血統である。それにひきかえ母后カトリヌはたかが薬屋の娘ではないか、というのである。マリーにとってカトリヌは卑しい「成上り者」(parvenue)である。これに対してカトリヌは権力を握るものこそ正統である、という実力主義を誇つた。カトリヌ・ド・メジシスがイタリ

アからフランスに持ちこんだのはマキアベリスムと美術の豪華な趣味とであった。

カルヴァンは樽屋の息子である。バルザックが、財産を持たないカルヴァンを政治的守銭奴と呼んでいることに注意しよう。

「思想が支配の唯一の方法となると、それは政治的守銭奴、頭腦によつて楽しむ人間、ジェジュイット派の人々のように権力のために権力を求める人間を生む。(…)ルーテル、カルヴァン、ロベスピエール等、これら全てのアルパゴン達は一銭の貯えもなしに死んでいる。」(「カルヴァン派の殉教者」二六三頁)

「芸術や快楽を棄て、粗末な食物を楽しく食べ、黙々として金を貯え、カルヴァンが彼の権力を楽しんだごとく、ただ頭の中だけでそれを楽しむ」(同二六二頁)といったジュネーブの風俗はカルヴァンが作ったのである。

守銭奴の禁慾的な節約は資本を形成する。自らに消費を禁ずるから資本は投下資本となり、いよいよ増える。労働と利潤追求は、それ自体が目的となり、生活の他の部分は犠牲にされる。バルザックは「人間喜劇」の中に多くの守銭奴を描いた。彼は守銭奴の中に近代資本主義の精神を見たのである。そしてカルヴァンは守銭奴達に思想的根拠を与えた人間なのである。そこでカルヴァンは、ゴブセックやグラランドと同じく偏執的な情熱のために人間らしさを破壊された老人として描かれている。

ルカミューは、四代つづいた毛皮商の主人である。彼は商売の場である宮廷でも、同業者の間でも、教会でも誠実な信用できる人間と見られるような道徳的な生活を送っている。一方では、その達成に

は何世代もかかるような壮大な野心を抱いている。しかもそれを家族にさえさとらさないほど冷静で強固な性格である。時勢の先の先まで見抜く鋭い洞察力もそなえている。厳密な計算と打算がある一方、独り息子を賭けた大博奕をうつ勇氣と冒險心の持主である。そして遂には野心を遂げるたくましい実行力。バルザックは「市民階級の典型」をこのように描いた。

ギユイズ家を向うにまわしても、カトリクスと取引しても堂々としていたルカミューの自信はどこから来たか。封建時代の古き武力ではなくて、知力と富という新しい力を握っているという自信からである。

毛皮商人はまた真にルネッサンス時代の人間であつた。アンボワズ・バレとルカミューの関係は、ルカミューが新しい科学においた信頼を物話っている。彼はベンベヌート・チェリーニの美術も知っていた。

バルザックによれば、単純、偉大、自由、高貴が近代のあけぼのの時代における市民階級の特徴であつた。登場人物ルカミューは、この理想を満足させるに足る魅力的な人間として描かれている。

「カルヴァン派の殉教者」(一八四一年)の構想は、一八三五年から既にあつた。執筆が遅れたのは、バルザックの関心が「セザール・ピロト」(一八三七年)の方に向いたからだという。(Cité française du livre 版バルザック全集十一巻「カトリクス・ド・メジシス註釈」)。示唆に富む事実である。

「この物語も願わくは、市民階級の有為転変の詩となつてくれるように。こうした市民階級の盛衰のあとなどは、今迄だれも考えも

付 記

しなかったものである。それほどそこには壮大なものが欠けているようではあるが、でもやはり無限の大きさを持っている。」（「セザール・ビロトール」）

「たしかに昔の市民階級は偉大で自由で高貴だった。彼等は、現代の市民階級より一層勝ち誇っていたであろう。昔の市民階級の歴史は編まれねばならない。そのための天才が必要だし、待ち望まれているのだ。」（「カルヴァン派の殉教者」）

セザール・ビロトールは、バルザックにとつては、現代のブルジョワ社会の英雄である。そしてルカミューは市民階級のいわば神話時代の英雄である。（二）においては「カルヴァン派の殉教者」の真の主人公がルカミュー家の人々であることをみたが、さらにバルザックは、市民階級の歴史を探るといふ、はつきりした意図のもとにルカミュー家の人々の物語を書いたということが出来るであろう。「アンボワズの陰謀」事件の中にバルザックは近代的勢力の抬頭をみた。そして近代的勢力の中心は市民階級だったのである。

「カルヴァン派の殉教者」は、バルザックの歴史小説と呼ぶにふさわしい作品である。バルザックは「カルヴァン派の殉教者」を書きながら、「人間喜劇」全体の主題から離れることがなかった。これは「人間喜劇」の主人公達の先祖の物語である。バルザックの描いたルカミューの像が決して色あせた印象を与えないのは、バルザックが「人間喜劇」の主人公達とルカミューとの血のつながりを説明し得たからである。

この小論においては「カルヴァン派の殉教者」の歴史小説としての特徴を強調した。しかしバルザックはこの小説の登場人物の中に「時代の精神」を表現しようとすると同時にバルザック自身の政治思想を語らせた。バルザックにとつてカトリスム・ド・メジスとルカミューの提携は、強権政治の理想と自由競争の結合でもある。バルザックの政治思想には互いに矛盾するこの二つの理想が結びついている。

この小説は歴史小説であると同時にジッドが指摘したように一種のユートピア小説でもある。歴史観と政治思想は切りはなせない。この小論では、ただ、この小説がはつきりした歴史観を持った歴史小説であることを指摘するに終った。この歴史観と政治思想の相互関係についての追求を今後の問題としたい。

参 考 文 献

- Balzac : Le Martyr Calviniste (Euvres Complètes de H. de Balzac 41, Librairie Paul Ollendorff)
Balzac : Essais sur la Situation du Parti Royaliste (Euvres Complètes de Honoré de Balzac, Euvres Diverses II, Conard)
Balzac : Grandeur et décadence de César Biotteau (Euvres Complètes de Honoré de Balzac, Conard)
ジッド「日づけのない日記」(ジイド全集XIII、続ブレタクトスト新潮社)
Gean-Hervé Donnard : Balzac, les réalités économiques et

- sociales dans la Comédie Humaine (Armand Colin)
- Maurice Bardèche: Balzac Romancier (Librairie Plon)
- ルカ・チ「歴史文学論」(山村房次訳 三笠書房)
- Maurice Crouzet: Histoire Générale des Civilisations, tome IV, Les XVI^e et XVII^e siècle (Presses Universitaires de France, 1961)
- エンゲルス「家族、私有財産及び国家の起源」(西雅雄訳 岩波文庫)
- 河野健二「絶対主義の構造」(日本評論社)
- マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(梶山、大塚訳 岩波文庫)